

読解『風と共に去りぬ』(Ⅲ)

林 彦 一

訳本は大久保康夫／竹内道之助訳の新潮文庫。それに付された、例えば (I、一、12) というのは、原書の 第一部 (Part One)、訳本の巻数 (一) そして 12 頁、ということを示している。また下線はすべて私が施したものである。

先ずは、冒頭に、「パイロン編の本には、アン・ジョーンズによる (中略) 論文も寄せられている。ただしジョーンズは、スカーレット・オハラが伝統的な南部の女性役割から逸脱していくのを評価しながら、最後にはレット・バトラーと結婚し、レットもまた、南部の大義のために立ち上がるのを指して、この作品における勝者は『旧秩序』だと、結論付けている」(小谷野敦『聖母のいない国』、青土社、19、2002/9/10) という引用を掲げることから始めよう。と云っても目下のところは、このなかの「伝統的な南部」と「旧秩序」が考察の対象で、ジョーンズの見解、つまり勝者云々についての私の見解 (反論) は、その私の考察を踏まえてなされるので先の方になる。

伝統といい旧秩序というも、別にアメリカ南部に限ったことではない。どこの社会にでも在るもので、因習・保守・規範からときには社会的常識といろいろ呼ばれているが、我々の最も身近に聞き慣れた用語を使えば、阿部謹也氏の「世間」で、氏は「日本人はごく例外的な人を除いて個人であったことはほとんどなかった」とし、「皆何らかの世間を構成し、その中で生きてきたのである」と言い切っておられる。

『風と共に去りぬ』もこのような「世間」(南部社会) が盤踞していて、そういう世間と対立するレットなどの主人公たちの生きざまを描いた小説である。しかし小説というのはそういうものなだから、問題は対立の仕方ということになるのであろうが、それは小谷野氏が大きく関心を持っておられるところの、この作品は大衆小説か純文学か、という問題に関連してくるだろう——氏は私などと違ってあまりにも洗練された文体を使われるので、婉曲的で趣旨が私などのような下司には理解しにくい——。そして私の答えは、この作品の中の対立はあまりにも派手で過激である、言い換えれば大衆に密着しすぎているということが、「純」に馴染めなくさせている、というものである。

参考までにこの作品中の「世間」というか「世間人」に一瞥を与えておくなら、この小説の始めから最後まで、徹底的に南部社会と対峙するレット、男との関係で悉く社会の顰蹙を買う——気にしないというのではない。そこまで鈍くはない——スカーレットは分りきったことなのでおいておくとして、戦後、金 (事業) のために、彼女が横取りした、妹スエレンの金持ちの恋人フランクという男が、格好の例である。

戦時中、レットがしじゅうスカーレットといっしょに歩きまわって、当時よく世間のうわさになったことも、フランクは思い出さずいられた。このごろでは、ふたりについて、もっといやなうわさがひろがっているに相違ない、と彼は思った。彼の友人たちも、製材所に関係のあることなら、スカーレットの行動について、遠慮なく、いろいろのことを言ったが、この種のことになる、だれひとり、あえて口にする者はいなかった。しかし、彼とスカーレットが、以前のように晚餐やパーティによばれなくなり、また訪問してくる人が、だんだんすくなかったのをフランクは気にせずにはいられた。スカーレットは、近所の人たちを、たいがいきらっていたし、それに製材所のほうの仕事がいそがしくて、好きな人たちとさえ会いたいと思わないほどだったから、訪問客がすくなかったことなど、すこしも気にしなかった。だが、フランクの胸には、それがひしひしとこたえた。

フランクは、その全生涯を、「近所の人たちは、なんとというだろうか？」ということばに支配されてきた。だから、こうして、かたっぱしから妻に社交上の慣例を無視されると、その衝撃に、まるで抵抗できなかった。すべての人がスカーレットを非難し、妻に「性別のない」行為を許すというので彼をまで軽蔑するのを、彼は感じていた。彼の見解によれば、スカーレットは、夫として許すことのできない多くのことを、あえて行っているわけだが、彼が、そんなことはやめてもらいたいと命令したり、それを問題にしたり、批評がましいことを言ってさえ、たちまちあらしが頭上で爆発した。(IV、四、57-58)

さて、レット・バトラーはこういう「世間」とは別の世界に生きている人間であった。ということは精神的にも生計の面でも、他とは違ったものがあるということだが、それは、彼が戦争を利用して武器や食料の密売で金を儲けているということと、そしてこれは後に改めて取り上げるが、「南部の大義のために立ち上がる」直前の彼のセリフ、「ぼくはきみを愛している。二人とも裏切り者で利己主義者の不徳漢だ。じつによく似ているじゃないか。だからこそ、ぼくはきみを愛するのだ。ぼくは、自分らさえ安全で愉快なら、世界がどうなろうと、すこしもかまわない種類の間人だ」(II、三、311)に示されている。と聞けば、全くどうしようもない手前勝手な無頼漢、とそっぽを向かれるかもしれないが、こういう外面のレッテルだけで人を判断する人は小説など読まないほうがいいし、小説とは無縁の人である。

つまりここでは、レットの仕事や彼の不道徳を問題にする前に、ふつうの人間ではできないことをやっているのは悪いことかもしれないが、戦争や戦後の混乱期は、もともと法違反などとは桁違いのことをやった結果であるので、ふつう以上の力のあるものが力を発揮するのはそういう、ある意味で「無法地帯」であるのもやむを得ないこと、と考えるべきであろう。これは日本の戦後の状況と比べれば分ることで、戦争状態や平和でない時は、平和の時のような正業では能力のある個人の力は発揮されない、といった事情が参考になるであろう。今で云うならベンチャー企業——さしずめ日本ならフリーター？——、これもその危険性の故にか、日本では考えられないのにアメリカでは当たり前、ということを目にするが、それと同じであろう。そしてレットがエライのは、先の引用に見たように、自己認識というか、自らを「ならず者」と熟知しているうえ、特筆すべき点は、そういう自分と同質なるものをスカーレットに見るが故に彼女が好きでたまらない、ということである。人が他者(異性)を好きになる場合、性格・人間性が反対・対照的であるというのが却っていい、などと言われることがあるが、それは自分と同種の間人関係に恵まれた人間の余裕？で、レットのように完全なる一匹狼(loaner)は、自分と同種の間人を見出すということは、さながら四面楚歌の中で起死回生の援軍に遭遇したようなものである——

ということは、逆に「自分と同種の人間関係に恵まれた人間」は、自分と同じような人間や意見に出会っても、それほど感激する事でもない、ということになるのであろう。そのうえ、レットのような人間は自分の「悪」をよく知っているので、或いはこの世の醜さをよく知っているので、それだけ「純粹・正直・美・真実」というものに、強烈に惹かれ・引きつけられていくだろう。つまり、「おんな・子ども」だ——これはこれからタツプリ見ていくのだが——。

局外者であるということは、内部の人間がよく見えるということである。しかし問題は見えたとにある。単なる傍観もあれば、達観もある。白眼視もある。レットの場合は、先に私が言った「対立はあまりにも派手で過激である」から、そういう消極的・否定的なものでないことは明らかだろう。つまり部外者でありながら、徹底的に内部者と関わり合うのである。それには当然のことながら、俗に言う実力が要るだろう。旺盛な精力・生命力・胆力・気力（迫力）に豊かな財力そして何よりも人並みすぐれた知力・精神力。と書けばこの派手さ？に辟易、純文学はおろか大衆文学ですらなく、少年雑誌に載るような単なる英雄譚・武勇伝ではないか、となりそうである。惜かにそういう面があることは否定しない。しかしこの小説が徹底した対立・対照から成り立っているように、その英雄の裏に、ふつうの人間以上の「人間らしさ」があるのだ。英雄はふつうの人間の上に君臨している。しかしレットは、ふつうの人間と同じレベルにいて、同時にその水準を超えたり下がったりするのである。言い換えれば、ふつうの人間であったのに、何の因果かアウト・サイダーになってしまった。しかし世の中と縁を切るわけにいかず、そのためにちょっと人とは違った考え方・見方をしなければならなくなった・するようになった、と言えばいいか。

「徹底的に内部者と関わり合う」のは何故か。孤独だからだ。いくら社会をはみ出した人間といっても、彼も人の子、「孤独」でないはずはない。彼が世間に向かってわざと対決姿勢をとるのは、実は彼はそれによって救われるからである。公然たる反抗がなければ、孤独なる人間は犯罪者になるか、精神異常者になるかしか道はない。

つまりこういうことだ。彼が世に逆らえば逆らうほど、それは逆説的に彼の孤独・寂しさ、或いは人生のはかなさをそれだけ強く感じているということだ。こういう人間にとって、世間の人間が右往左往する「戦争」という状況は、却って生き甲斐を与える、と言うことができるだろう。だいいち、彼が何を云おうがしようが、平和のときほど人の注意を引かず、しかも彼はある意味で「戦争」の人生を歩んできたのだから、こういう危機的状況では世人の助けともなり得るわけである。

ところでかかる絶対的な「孤独者」の、世間との接点はどこにあるのだろうか。批判や反抗は外に出た現象に過ぎない。内面はどうなっているのか。それはふつうの人間とは違ったものを求めていると言えるだろう。さよう、社会の外に己が生場の場を求めるということは、社会に飽き足らなかったからである。一般的には、社会はハムレットが言うように「雑草がはびこっている」。不正や矛盾・欺瞞がはびこっている。柳美里がいみじくも言った（書いた）ように、「仮面の国」である。従って本質的にアウト・サイダーは、真実・正直・純粹なものを求める念が強すぎたために、出て行かざるを得なかった、という道理になる。社会の醜さは出て行ったあと余計に目に

入ったことであろう。本音で生きる、真剣勝負で生きる、こういう人間を「世間」は歓迎しない。加えて世間はやはり Man（大人・男）が幅を利かすところである。それは「おんな子ども」という言葉に集約されている。そして「おんな子ども」は大人・男に比べれば真実・正直・純粋により近い（「おんな子ども」が大人・男に比べてより不誠実で不純だったら世も末だ）。而してこの小説の最大の魅力は、レットと対世間よりも、彼と「おんな子ども」の関係にある。

「おんな子ども」という言い方は、特に日本でそうではないかと思うのだが、軽蔑的なニュアンスを帯びている。しかしこれは、男尊女卑的で、大人・男がのさばっている社会（世間）と無縁ではなく、大人・男が作った社会がイビツであることを知り、「子どもは大人の父である」を知った人間、或いはそういう社会で煮え湯を飲まされた（挫折を嘗めさせられた）人間には、「おんな子ども」が生き甲斐になるのである。なぜなら、「社会」でソフィスティケートされていない人間は「おんな子ども」であるからだ。

英雄豪傑色を好むと言う。この真意は、社会を睥睨した人間には、「おんな子ども」が格別のものとして映るということだ。

或いはこう言ってもいいかもしれない。社会でのおぞましき男たちとの戦いで疲れた心に、或いはおぞましき社会での戦いに疲れた心に、「女心」「童心」はまるでオアシスである、と。

以上のような説明ではレットの解明にはなってもスカーレットのそれにはなっていない。スカーレットは「おんなと子ども」の両方を具現した人間、と言えいいか。但しその場合の子どもは、「童心」というより、自己中心の子どもだが——それでも「可愛い」のは、「おんな」だから——。

人間は大きく分けて社会順応型となんらかの意味で反ないし非社会型の二つになる。小説家或いは小説の主人公は後者に属する。レットは反社会型、スカーレットは非社会型だが、この小説は前者にアシュレとかメラニー——この二人については次回取り上げる——といった人間や世間に弱い人間等々あまりにいろんな人間を書きすぎたためにも、大衆小説と呼ばれるようになったのであろう。純文学は狭く深く掘り下げるのに、この小説は広く（そしてかなり）深く書いてしまった。

反ないし非社会型の人間は社会順応型が社会に忠実であるのに対して、自己に忠実・正直である。社会は社会に忠実な人間を好む。反ないし非社会型の人間は孤軍奮闘をしなければならない。戦いのあとの平和、荒々しい男の世界の暴力とかけ離れた平安・やさしさが欣求されるであろう。つまり「おんな子ども」の世界である。一見、レットは俗に言う macho な男に見える。しかしそれは表面、内面はふつうの世間的な人間よりもずっとデリケートであり、人間的である。Macho と全く反対なものを抱え込んでいる。

レット考察には「おんな子ども」の視点以外に、「神と獣」という概念も役立ちそうである。

人間存在といえば、「神と悪魔」というのが従来の西欧の究極の発想であった。つまり、この両極に引き裂かれたのが人間の本質ということだが、そしてこれは人間・この世を「善と悪」の観点——飽くまで人間中心ということ——から見ることと同じであるが、アメリカではこれが「神と獣（動物・自然）」ということになる、というのが私の考えである。よく悪魔も元は天使だっ

た、などと言われるが、前世紀中頃までの文化——限りなく進歩するという文化観——をよく象徴していると言えよう。ハムレットは人間の「すばらしさ」と「塵芥的存在」の両面を同時に口にしているが（Ⅱ.ii.310-16）⁽⁴⁾、これは彼が「神と悪魔」の視点から「神と獣」への志向を指向して、それは、この劇の結末部で実際的な人間フォーティンブラスが登場する場面で、彼に感嘆するハムレットに示されている、と私は見る。本来なら（従来の価値観なら）、フォーティンブラスはなんらかの付加価値を担い、夥しい死者やハムレットの断末魔の姿を見て、批判的・警句的なせりふを口にするとところだろうが、それは「神と悪魔」の視点であって、「神と獣」の視点からは無縁である。

「神と悪魔」の両極に引き裂かれた人間であれ、「神と獣」の両極に跨がった人間であれ、そういう人間は数少ないので、大半の人間は神と悪魔（獣）の中間に「人間」として安住し（ようと）している。俗に言う「世間的人間」、「人間的な、あまりにも人間的な」と評される人間である。そして、繰り返すようだが、この小説にはいろんな対立があるも、この2種類の人間がさまざまに織りなす壮絶なドラマ、と言えはこの小説の本質を突いたことになるか。

悪魔を堕天使と呼ぶのに対し、獣は猛獣もいれば人間の友としての犬猫もいる。話しが飛躍するが、現代のテロは「悪魔」では片付かず、(西欧)の文化・文明を憎む「猛獣」としか考えられない。大量無差別殺人兵器を手にした「猛獣」は手懐け得るのか？という問題になる。山崎正和はテロにイアゴウと松本智津夫をダブらせているが、私見ではイアゴウと松本智津夫は同じ文化圏に住んでいたのに、テロは全く異質の文化圏の所産ということで根本的に違うところがあるのではないか、というものである。

「神と獣」の別称は「美女と野獣」である。もちろん『風と共に去りぬ』では、スカーレット・オハラとレット・バトラーがそれに当たるが、レットの「野獣」が単なる野獣でないぶん、スカーレットも単なる美女ではない。小説の文字通りの書き出しは「スカーレット・オハラは美人というのではなかった」であるが、美人という一般の基準は彼女の「魅力」の前に問題ではなくなるし、「奇妙に人を惹き付ける顔」についての、「フランス系の貴族の出である母の優雅な顔立ちと、アイルランド人である父のあから顔の肉の厚い線とが、目立ちすぎるほど入りまじっていた」は、そのまま「神と獣」を指している（更に小さい点を挙げれば、「こわくて黒いまつ毛が、星のように目のまわりをふちどり」、(眉が)「マグノリアの花のような白い肌に」という譬えも示唆的であろう）。

「獣・動物」といってバカにしてはいけない。彼らの生存は、特に群れから孤立した場合の生存は、想像に絶するものがある。動物的嗅覚と言うが、感覚は鋭利に研ぎ澄まされ目は油断なく光っているだろう。さよう、レットとスカーレットの顔や目の表情・行動は獣のそれである。それはレットの場合は男だから、女とスカーレットに対して出てくるが——スカーレットはレットと会うたびに、例えば小説の冒頭部で始めて会ったときの、「彼女の目は、ひとりの見知らぬ男の姿に落ちた。それは彼女に、ひとりの見知らぬ男の目をひきつけたという女らしいよこびと、自分のドレスの胸があまりにもローカットすぎるといふきまりのわるさを、同時にするどく感じさせた（Ⅰ、一、167）」といったセクシュアルなものを感じさせられている——それを全

部拾ってみると面白いだろう⁽²⁾ ——。

スカーレットはさすが女だけあって自分の欲しいものを手に入れる場合にその獣性は発揮される。彼女のいちばんの謎は、最後までアシュレを追い続けることだが、それは子どもの「ないもの」ねだりに通じている。彼の上品さ・学識（知識）・おとなしさが自分にならぬからか——スカーレットは自分にならぬものに憧れるところがある。これは成長意欲か、月が欲しいと駄々をこねる子どもと見るか難しいところだ——、アシュレが他の男と違って彼女を崇拜しない（自分に拝謁するところがない、つまり他の男と違って彼女の手に入らない・彼女に靡かない）男だからか、いずれにせよこの執着・執念は、「人間」ではちょっと考えにくい欲望であろう。

この小説の魅力を探るには、先ずこの「神と獣」の人間が如何にして生まれたか、またそれはこれまでの人間とどう違うのかを知ることである。通俗に言えば遺伝・隔世遺伝という奴だが、作者はうるさいほどにこれに言及している。

既に戦争は終わり、スカーレットは一家再建のためとはいえ、例によって南部社会の因習に逆らった行動やら、ならず者の黒人への恐怖やらで孤独な彼女に、レットとの付き合いが唯一の慰めであった——そしてそれがまた、社会の指弾の一つとなるのだが——。そして、レットによるスカーレットの自己認識の手ほどきが始まるのである。

「きみのけしからん暴言は黙殺することにして、はじめの問題にかえろう。この点については、はっきり考えをまとめておかななくちゃいけない。もしきみが、人と違ったことをやれば、きみは、おなじ年ごろの人たちからばかりでなく、きみの両親や子どもたちからまでつき放されるだろう。（中略）ただ、きみのお祖父さんやお祖母さんは、きみを自慢しているかもしれない。『さすがはわしらの孫だけのことはある』とね。また、きみの孫たちは、うらやましそうに溜息をついて、いうかもしれない。『お祖母さんは、すごいじゃじゃ馬だったらいいな』そして、きみのまねをしようとするだろう」

スカーレットは、おもしろがって笑った。

「あなたも時にはほんとうのことをいうのね。そう、ロビヤールのお祖母さまのことを思い出したわ。（中略）お祖母さまは、まるで氷柱のようにつめたくて、自分はもちろん他人のお行儀についても、とてもやかましかったそうだわ。でも、三度も結婚して、お祖母さまのことで、なんども決闘騒ぎがもち上がったということだわ。ルージュをつけて、びっくりするほど胸のひらいたドレスを着ていたわ。それに、ぜんぜん---いえ、あの---下着は着けなかったようだわ」

「すると、きみは一生けんめいお母さんのようになろうと努力したくせに、内心では、ひどくお祖母さんにあこがれていたわけだ。ほくには、バトラー家のほうに、海賊だったお祖父さんがいた」

（中略）

「いや、お祖父さんは、金を手に入れるためなら、大勢の人に板の上を歩かせるくらいのは平気でやったらいい。とにかく、ほくのおやじが大金持になるほどの大金を残したんだからね。（中略）お祖父さんは、ほくが生れるずっと前に、酒場でけんかをして殺された。お祖父さんが死んでほっとしたのは、いうまでもなく子どもたちだった。（中略）しかしほくは、お祖父さんにあこがれて、おやじよりも、お祖父さんを見習おうとした。おやじは、りっぱな習慣を身につけた、信心深い、愛すべき紳士だった——だから、人柄については、くどくど説明する必要もあるまい。スカーレット、きみの子どもたちは、（中略）きみを認めないだろう。きみの子どもたちは、たぶん、おとなしい神経質な人間になるだろう。じゃじゃ馬の子どもは、たいていそんなものだ。それに、子どもたちにとって、いっそう悪いことに、きみも、世間の母親なみに、自分の経験した苦勞を、子どもにはなめさせまいと決心しているらしい。しかし、それはまったくまちがっている。苦勞は、人間をつくるか、こわすか、どちらかだ。だから、きみも、孫ができて、その孫から認められるまで待つしかないだろう」（IV、四、129～31）

ところで、この引用中の「きみも、世間の母親なみに、自分の経験した苦労を、こどもにはなめさせまいと決心しているらしい。しかし、それはまったくまちがっている」だが、これが、この小論の冒頭に挙げた小谷野氏の引用したジョーンズの見解に対する「私の見解（批判）は先の方になる」と合体するのである。どういうことか。それは、「ジョーンズは、スカーレット・オハラが伝統的な南部の女性役割から逸脱していくのを評価しながら、最後にはレット・バトラーと結婚し、レットもまた、南部の大義のために立ち上がるのを指して、この作品における勝者は『旧秩序』だと、結論付けている」が間違いであるように、レットの「きみも、世間の母親なみに、自分の経験した苦労を、こどもにはなめさせまいと決心しているらしい。しかし、それはまったくまちがっている」も間違っている、ということである。たとえば、作品の登場人物の発言に、読者がその発言は間違っているなどということは、前代未聞かあり得ないことかは知らぬが、別にレットの「らしい」（probably）という言葉でそう言っているのではない。実は、この作品をどう読むか、その大きな鍵がレットの僅かなこの一句に込められていて、それがジョーンズの見解とも関連してくるということなのだ。

ところで小谷野氏はジョーンズの見解について何のコメントもされていないが、ジョーンズの見解は私には全く理解できない。こういう外面だけでよく小説が面白く読めるものだ、とさえ思っている。スカーレットの結婚は止むを得ない必然的なものであった、本来ならもっと早くにレット・バトラーの軍門にくだっていてもちっとも不自然でもなかった、というふうを読む私からは、これは当然の反応であろう。レットとの結婚をこんなにまで引き延ばした（粘った）ということは、アシュレとの関係（愛）からいっても、レットとの始めからの関係からいっても、実に筋の通った帰結である。アン・ジョーンズはスカーレットの苦しみ、生きることの凄惨さがちっともわかっていない、ディレクタントと思える。

次に「レットもまた、南部の大義のために立ち上がる」だが、ジョーンズにはレットがこの期に及んで（あそこまで来て）翻意・回心して、「南部を負けるとか云って（貶して）、悪うございました」とかなんとか懺悔して、雄々しく立派に南部の大義に殉じようとした、とでも考えているのだろうか。それではこの小説は、「旧秩序」の勝利とかいうことを突き抜けて、小説自体の構成が破綻してしまうことになるだろう。最初から一貫して最後まで、ヒーローとヒロインは、淋漓たる「自我・人間性」を発揮しているので、従って「結婚」と「参戦」は、「自我・人間性」をより輝かしくさせる逸話でこそあれ、決して『旧秩序』への敗北などではない、というのが私の解釈である。

という説明だけでは納得できまい。そこで以下、納得してもらうための努力をしてみる。

まずは、「レットとの結婚をこんなにまで引き延ばした（粘った）ということは、アシュレとの関係（愛）からいっても、レットとの始めからの関係からいっても、実に筋の通った帰結である」だが、作者は実に周到に、レットとスカーレットが、本人たちはそうとは意識していなかったであろうが——それはこれから見るように危機的状況があったからでもあるが——、肝胆相照らすような心の底からの、いや丁々発止の会話を、周到に四度行わせている。最初のそれは、北軍の包囲・攻撃、メラニーの出産、アシュレが死んだのではという心配等で、「不安で気が狂

いそうだった」(Ⅲ、二、216)という状況裡。二度目は、ヤンキーが来るというので恐怖に襲われ、無謀にも故郷のタラに帰ろうとする場面(Ⅲ、二、290ff.)、三度目は戦後の復興活動(製材工場)でやり過ぎたスカーレットが、「世間」から孤立し苦悩する時に、「たったひとりだけたよりになり、理解のある人物がいて」「べつに申し合せたわけでもないのに、毎日のようにレットと出会った。(.....)さびしい道を馬車で通りかかると、レットはよく馬を乗りつけてきた」(Ⅳ、四、123)で始まる場面、そして遂に結婚に到る四回目、今度の不安は想像できるように、黒人に纏わるもので、例の政治的秘結社クークラックス克蘭のために、亭主のフランクが殺され、アシュレまでも危ない、という危機的状況でのレットとスカーレット(Ⅳ、四、340f. - Ⅳ、五、56)。

これだけではない。作者は、レットのいないときでも、絶望的状况からレットと結婚しようと思わず考えてしまうスカーレットを巧みに描き込んでいる。その一つ、黒人とならず者のヤンキーがタラを乗っ取るかもしれないという恐怖。

(彼と結婚しよう)と彼女は冷静に考えた。(そうすれば、もう二度とお金のことなんか心配しなくてすむ)

二度とお金のことなんか心配しなくてもいいということ、タラが安全だということ、(.....)ああ、それはなんと感謝すべき思いだろう!(Ⅳ、三、211)

とここまで辿ってきた私には、よくぞ頑張った、と寿ぎこそすれ、妥協とか旧秩序への敗北などという解釈はいっさい聞こえない。

しかし私にとっての興味は、この何度かの逢瀬?の内容の質的变化を、作者が如何にうまく描いているか、にある——スペースの関係でそこまで立ち入ることが今回はできないが——。

さて「結婚」については片付いたとして、私はもう一つ、「きみも、世間の母親なみに、自分の経験した苦勞を、子どもにはなめさせまいと決心しているらしい」。しかし、それはまったくまちがっている」を否定する発言を行なっている。これについては実は、ジョーンズのもう一つの提示「南部の正義のために立ちあがる」と輻轉しているので、先ずそちらを解明することにする。「立ちあがり」は、先に見た2回目の出会いの際の事件が起爆剤であった。北軍がやってくるというパニック状態、今度のレットの登場(訪問)は、一回目と違ってスカーレットの方から助けを求めて探し出した結果である(それだけ二人の結びつきに近づきつつあることを示している、と考えることができよう)。

北軍が攻めてきて恐怖に襲われ、「どこに救いを求めたらいいだろう?知っている人たちは、みんな自分を見すててしまったのではないか」(Ⅲ、三、280)、という状況下、当然レットに助けを求めることになる。

恐怖に陥ったスカーレットが、あろうことか故郷のタラへ行くのだと言う。そのへんに北軍はうじゃうじゃ、タラへ帰っても焼け野原だ、きみはきちがいだ、というレットも遂に折れて、命懸けで盗んできた痩せ馬で戦禍の町に行く。途中で出会った、戦いやぶれて幽霊のように疲れ切って歩いてくる南軍の兵士たち。レットは嘲弄的に言い放った

よく見ておくことだ。かがやかしき大義のために戦った軍隊の退却する最後の部隊を見たといって孫たちに語ってきかせるときもあるだろうからね。

レットは最初からこれが無謀な戦いであり、南軍の無知に基づくものということで嘲弄的であった。そしてこれは間違った考えでなかった。レットの際立った特徴は、現実を正しく見抜くというにある（動物的嗅覚）。そして、これをスカーレットに当てはめると、「これだから、ぼくはきみが好きなんだ。きみは、ぼくの知るかぎり、ただ一人の正直な婦人だ。罪悪だとか道徳だとかを口にして問題をごまかさず、物事の実際的な面だけを見ることのできる、ただひとりの婦人だ」（Ⅲ、二、228）というふうになる。当然、スカーレットも嘗ては同じように考え、南軍の兵士たちを愚かだと考えていたのだが、この深刻な場面ではそれも忘れて、レットの言葉が彼女の癪に触る——「この悲惨な味方の隊列を嘲弄する彼が憎くてならなかった」「まじまじと彼を見つめる彼女の目には、はげしい憎悪と嫌悪が燃えていた」——。だが、もちろん彼女のこと、自分に直接関係することがなければならぬし、即物的な事（利益）がなければならぬ。そこで作者は、巧みに、「彼女は死んだチャールズや、死んだかもしれないアシュレや、浅い墓のなかで朽ちつつある元気で勇敢なすべての青年たちを考えた——（スカーレットにとって、すべての青年たちは彼女に顔づく者たちであった）引用者注——」を書き込む。

さて、彼女がこれほど癪に触ったということは、おそらく今後永久にレットを見限る要因になったと思われる。しかしレットは、自らの失言で相手から見限られるようなチャチナ人間ではない。この息詰まる場面を打開するのに作者が使ったのは、レットの中核をなす「子ども」であったのだ。先の引用に続く場面、重要なところなので画像引用する⁽³⁾。

末尾の画像引用文を読まれて、何でも無い光景と仰るか。ところがさにあらず、この後、レットは異様としか言いようのない態度・表情を示し、驚くべき行動に出るのである。それは先ず、ひげの男が黙ったまま道を曲がって行ってしまったあとを、レットが手綱をゆるめたまま見送っている時に表れた。

その浅黒い顔に奇妙に沈痛な表情があらわれた (304)

このとき彼らが隠れていた倉庫に火がつき、レットは気違いのように馬を走らせるのだが、「彼の顔は自分がいまどこにいるのかも忘れたようで、心がどこか遠くをさまよっているように見えた。広い肩を前にかがめ、なにか不愉快な思いをかみしめるように、あごを突き出していた。火炎の熱気で、額やおおに滝のように汗が流れていたが、彼はそれをぬぐおうともしなかった」とある。これはこの後を読めばすぐ判ることだが、レット、あの不敵で、人生を知り尽くしたかのようであったレットが、激甚なショックを受けていたことを示しているのだ。つまり、アキレス腱と言ひ弁慶の泣きどころという奴で、彼の人間性の根幹・魂の奥底・無意識界に先程の光景が触れたのである。

相変わらず黙りこくったままのレット。スカーレットが不気味に感じて当然だ。しかし、「彼

がそこにいるだけで、とても気強かった」、というのも肯ける。面白いのはこの後だ。

ということで紙数が尽きた。草稿はこれまでの3倍はあるが、「つづく」ということで打ち切ることにする。 —つづく—

【注】

- (1) ハムレットは、いよいよ王との対決が迫ってきて、その一環として自分に接近してくる幼友達のローゼンクランツに、「最近の自分は快々として楽しまぬ」と言ったあと、「この人間、まさに自然の傑作（……）あっぱれ神さながら（……）、ありとあらゆる生物の師表。」にすぐ続けて、急転直下、「人間。それがいったいなんだというのだ。この身にはただの塵芥にすぎぬ」（福田恒存訳）と吐露している。
- (2) もう一つ例を、本文の例のすぐあとに来るのだが挙げておこう。

あの男は、まるで——まるで、シュミーズをぬいだあたしの姿を知ってでもいるような目つきをしている（172）

- (3) 305. 第三部

口をきくことができなかつた。しかし、まじまじと彼を見つめる彼女の目には、はげしい憎悪と嫌悪が燃えていた。

部隊の最後の兵士たちが通りすぎようとしたとき、銃をひきずって歩いてきた最後の列の小さな影が、よろよろとよろめいて歩けなくなり、退却する部隊のあとを見送ったまま、そこに立ちどまつてしまった。顔は、ほこりにまみれ、極度の疲労のために表情をうしなつて、まるで夢遊病者のように見えた。背丈は、スカーレットぐらいしかなかく、銃とあまりちがわないほど小さかつた。よごれた顔には、ひげもはえていなかった。年齢は、せいぜい十六歳ぐらいだらう。義勇隊の一員か、あるいは学校をとび出して軍隊にはいった学生にちがいないと、スカーレットは、いたいたしく考えた。

なおも見ていると、少年のひげは、そろそろとくずおれて、とうとう砂ぼこりのなかに倒れてしまつた。すると、最後の列から、ふたりの兵士が、ものも言わずに少年のところへひきかえしてきた。そして、腰のベルトにとどくほど長い黒ひげの背の高いやせたほうの男が、黙つて、もうひとりの男に、自分のと少年のと二つの銃をわたした。それから、身をかがめて、少年をかるがると軽業のように肩にかついだ。重みで肩をかがめながら、ゆっくりと部隊のあとを追つて行つた。少年は弱りきつてはいたが、目上の者になぶられて怒ることもものように憤慨して叫んだ。

—おろしてくれ！ おろしてくれたら！ ぼくは歩けるんだ！—